浮世床二編 名物義新話 下

明治廿六年三月一日調
冊数 九
番號 壱拾六の
藏書は如何なる事情あるか親疎の別なく一切御貸渡一不申候
東京 華石 河光 治

へ13
3118
6

へ13
3118
6

村田

柳髪新話浮世床二編巻之下

江戸戯作者　式亭三馬　戯作

早稲田文庫

「陳」「珍」「浪」とも。きのふの奇々怪々といふるが目下に有やうにやこまるかそこらく珍浪ぐらう浪破ぐらう怎生いづれとの人ぞといふに。隣新道の人氏姓は虚田。名は一名八字は何とかいふ渾名式は拙者と呼び。仇名は馬陰といふ男スヘて何ら。あの高慢濃まる人物ぐ。今流行る綿頭巾に有さうな黄色る聲の人ぐ子。「陳」さそうく。招牌つきの風流優雅の

才子と見えて安倍川のやくざ。兼度達者な
「人ちがひ」強勢さ。看一看ちらと人も通さまく白き
樂屋へ這入ると何とも移へ男ぶり。詩人乃牛陰愛が
好の紙をさて。馬陰と蘭字の草書ぶり。なし草書へ
ろくとといてもも引書く右の方の手尻がぴんと跳く
わるとぶりこいつ心ま賣藥ゑびの招牌ゑ書こかとう
やく一物ありさうで見体い立流ぶり。世人ゑ解せと。唯境
しこだうで字體ぶた移物ぶと。ポト迂ゑびくゑ

詩人の準擬ゑ最ぶて。そことうゑ以ゑ馬陰が揮毫ゑ
あといてもどく紅毛仮字といひやと。間結休題きの酒樂
和尚と。あの男をとくと三個ぶ。岡山鳥が庵を訪ねこのさ。
山鳥大の酒客ぶ頗もりろき男さま。まづ寒暖後さ樂乃
大酒とろりやーぷ。そこぶ結下不在さ。却境裏門くろ
退出と雨ぶ。和尚醉ちまとく泥ゑる声ゑびく高ちゑ小唄
を唄ひの。折く大きやろかる声ぶくやくと笑て。何ら揭ぶ
さえのりーの浪々瞻々とくく歩て来やーく。結分西頭とく

渾名式白と呼る穴部窕うるお女ぐあり色と白と呼るへつふと。
うるとべ紅粉と粉ゝと大造ごろ〳〵。見るとく然号て生まるさ。
とろぐ子。モシ由兎うるせへ〳〵〳〵治よ実ぐ入ると好物の讀本
風ぐ出る。見えい癖ぐろ〳〵色〳〵〳〵と。彼少女ぐ家へちち〳〵町〳〵
片側町へ出く。道程半町あまり往くと右側よ浪人者う医
者うといふ住居で黒き出格子のある家さへ〳〵去ぎ中〳〵。
あの娘へ名代さ「ゞあまろ「と」柱ぐ」の女弦といふ方で格子
〳〵半身えせく〳〵往来の人をを弦居る娘ぐ〳〵いつでも立流る

衣裳付よ〳〵さうよ。金毛織の帯ぐ押物ごとのい委しい〳〵白
面金毛織九尾の娘ぢゃ絽〳〵「男ハ住る化」兼め〳〵「独馬
陰めへ〳〵あるぐ色とのある男ぐ〳〵。祇街でへ女郎の情後
よ縁深いく〳〵。阿曽比ぎ〳〵ひで地者柿の冠〳〵る者ぐ〳〵〳〵
買〳〵い「そりゃ」宮〳〵。湯灌場買と号〳〵〳〵。何でも
自慢といふ〳〵ひ人〳〵りぐ始〳〵るで。平生ぐ〳〵〳〵〳〵。
ちぐ〳〵て髪毛と一本〳〵抜〳〵く鎖式離と間白。歯磨式牛膽
のお国寝ぐ〳〵つひ額際〳〵〳〵小鼻の脇式二本抜ぐ抜ぐ

癖さ。其のうぶく襟巻ちよいと合せて襟先巻んで手巾
く。膝巻トント拵へて四角に坐る。此時両手で羽織の折返し巻
ズウイと巻いて。左右へヒラリと羽をとる。トキニ。といふが詰の序
詞さ。イヨサ。とこいつのがあつやと日向巻あつくと板堀へうけて
図両巻倫服ゐんぐつ衣紋をつくり。顔向く踵をとる風ぐ
後の風体をとる。髭を抓る。尾を拵イヤハヤうるさきといふん
とこの。トキニ其娘ハどうしこ子。不顕そとふさておきあの娘
ハ誰が通つてを出て居るの巻ちよどふ。ユウきつあ。どうを

好男子いうを出よ。おとゞ通る時刻巻考へくいつでを首巻
出とゞ。あつちおとつあきこ山時雨ゞよつでを毎日さつかけ
るのさそいつハ価落ゞらう。ナニサそとゞ地獄ゞとつとこへ
つる。ハテ女のつるでハ楊枝隠ゞらる。用をつて通ゐつ
巻。色夏師も骨のとまつこめゞ。其癖よさつ中抜へあよ
巻。さるくといふ奴ハ皆さつ倒さるとつくきまへどうふこまゞ
らう。金銭と出せば好ゐ男の女ゞ買へるのよへ巻紙ゞあ
ゞの。イヤさつ言ゐさんゐとこゞ色と癖との差別ゞよ。女郎

のハ色ゝ。地者のハ悪ごと云わぢ。色と悪とハ
菖蒲と杜若ハ真烏賊と鰯烏賊ゝ風情ハ
色悪ざゝ。茗荷南瓜と東埴瑞遠ゝ。新田のハ色悪ゝ
結ぶ立浦とハ。あの弦面で悪ゝ長面で悪ゝ。
心いきぐゝとハ。知覚今ゝ三人連ぐ飯くゝ。
合くゝ。と云ハ。貝殻ゝ。と甚先景ぐ。
貝殻ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
馬陰ハ盆石の富士とゝ。真黒ゝ。九面ゝ。

背の低さ三人何すとハ裁下ぐ。小兵ぐ。夫ゝ引ゝ。酒楽ゝ。
ゝ大の法師。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
陰ぐ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
格子のゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
馬陰ぐ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

いひつづけ身を退く。除かうとすると溝の端ぐるぐる。馬陰清
の中へ落ちて「ヤ」と云ふ大変ぶく〻深い清でもういぶ。背が低いう
てうど良い丈。ト気のあるイヤ又ふて坊も稗持も出るぐるぐる。
三人連行ぐるり洗ひ〻く。權く宗よりとてくわぐ。往来乃人
ぐるりとる。ふつとも拾へうと曳揚やうとすると東揚ぐ。
とうちの稼ぎ人と身をとぐひろぐ式とうう程めぐふず。
和尚へきのぐぐつくひろ〻〻ぐるぐ傳うとする。
又落めくよ。おめくへうまひるさんうていへどと聲を乗て情ぐ

強いて〻更に聽をいまぐど。俗く〻三人ぐ揚へ揚さぐまぐ始末の
ろうさ。馬陰色まで青ぐ頭うとぐ〻吐き清り。乳下ようり
あ宗まで全身泥まみれくまろりと立てわぐ。寒風
曹式射るぐぐく甚上水ぐふひろぐ。ぐ〻と震ぐろう。
狼狽る當式加味〻く一言式出さと者は。あ。ろう人立ぐ
さるゆ名に番うと横式持く式宰ひ半町ゆ向の辻
番まぐ連く移の。ぐまりくろ亜へひそあいく。名数指せ
〻り何角を抱さる亜ぐ。袂へふまい黒るあぐ袖口へ押出〻く。

博多の帯へ赤銅鎖がぶら付居たり。金唐革の前提に蚯蚓が
かぢり付て。打紐を啜るを。イヤハヤ「よく御胴の中から赤子
又ハ冬向すの人形「どうぞあるやしやますか」こまけ小田
もろこし天竺紙拭て頭の掃除紙まして下が。葱鴨に葱や
卓袱の芥が。本田の髷節に引掛てかるらいつちや嫌への。
松「そ様ふ」長「やめてくださいそれる」土「そちこちする肉ふしらで
ちが下の出入の職人が通りやさうに。それ紙形で鼻紙をつつ
よせやし。其内焚火にあて辛して実紙ふせぐしてもりで

溝の淵から辻番まで泥の足跡がついて。妖怪ろくろ首が跡を尋て。
退治をすべき光景である「娘ハどうぞして子娘ハいつのまにひらとん
ごろごろく。娘汁法でるのさ。好男とまで縁切どうぞするのが
縁切にするのが「短も宮さまよかよ。張合あるけれど「土「鉄面皮で
かかるをままをも放よ「地者よけちつて奴ハ根性のあれろまましい
あがりまでも流とさもふめ「うぬまけ者他所の孫子紙結で来る。
トいふ内の一延うちねが内で横の拗紙留までまで嫁へののが姫紙
拵りよ継て他家の帳合ままくまても出てたり。実拗紙くるまま

ゝろ。使ふまでもあるくのがあるゝあるときを。八百屋の青菜つが西の。
お豆腐さうの小僧の息子があるガナ。山中妹のお柚ぶ茶ごろ。いく
ぢやうの後。二枚さん寝ゝあゝ。通夜成してナ。そゝもいろゝどナ
若い男そろゝで数珠出さちゃんつく拝んどゝ。佛壇へ向く
新盆ばかりしろがろ。ぶつくぶつく念仏まうしてゐやうどんさそゝを
でもお豆ぶ義知とゝやゝいけどぶかゝまゝうさごろ切居
ちゃゝ只うゝ物でとおどゝせてく食徳ろくゐるのどナ
色まゝ後食事よゝその食事を性ぶ大乃生姜ごろ。

ろくそろぶろゝとゝ去後ゝ松茸もつろろさつゝ風呂てきゝて
風ぶろゝきゝ居るのぶゝくあるゝよゝ茶井の附うんぶゝ
ゝ世話ゝやきやゝゝぶんつく。ひとりぶ捌くんぶゝ。大乃さんゝ
きゝくゝまゝくナ。コレ米松ハ何ぶ。あてゝを後ゝ報恩ゝ人も後ゝ
松ゝ。ゝぶゝいろゝまゝくナ。きび助寂滅ぎやさんきゝをゝ同ゝ
遇ゝ。そゝ五ゝゝ乃ぶゝナ。戒名成ゝ人ゝこゝぶ。縁應信女ゝタウタ
二字戒名ゝッサ。何ゝ上二字あゝゝく縁女作ゝ女ゝゝまぶ好ぶ。
ちゝ二字ぶん後迄ゝ松ぶゝ。ゝ上ゝ今まぶの仏ハ院号ぶ

付く。ねんぶつ院。ねんぶつ信女と号おそろしく長い中よ。今度
のうぜ縄うござるし。施主よ。お法しとんざるとも。いろさ名と。
うるぞくも。のうるるおどく遠知さろ者をあるく。和尚さ名よ。
ぶつにんさ申ぶ和尚のいつまいた。今度の佛ハ天ざるし何を
修行ぶるいと。今まぐの佛さもん本山つを二度参詣いくさを。
いろく〳〵宗体の功とやぶござるふるく。院号よいてこと
ろさ〳〵よ。まろあの世郎ぶ在平二でた。出家さ名ハ和
尚厚茶くもちやく〳〵やとござるとろひるさろ素人

といふめ〳〵素人といふぶあるあろ。在家とろ檀家とろ云さらス
縄〈今そんろと云云さろよ。在家ぢやあ戒名ぶ縄いとまんざろ
安佛ようるやろる想をやとサ。修行ぶ縄くといひるさるけまど。
今までの佛ハ六十七十ようるろく死ぶろ。本山つを社ろ
功をあろ〳〵ちろうぶ。今度のハ高で十六ようる娘ざろ。
そこ中ちやどざやー後ハ言ハ一ぢん柔和忍辱ぶ戒名式
言ちろとまけてサ。院号ぶのろざア。せめく完二字足てろ
うるとハ。無文なのまだ式ろどく極よさやアぶろ。和尚め

もうとうとさうで。来和忍辱とむせうよ。こうつしやぐ来和
忍辱でと。韮蒜でと。修行の後へめよ。長い戒名をやうとぬ
寺法ぐどぐろトいうとてく。拙亭めは紙咥てく引出ぐ「そん
う紙式聴さけ。寺法といふぐそんる拙者ぐ。字二字
ふやーてやまぐいふ。さうとうやア絶ーぐうとう。法の
くのお布施も快く納めく。和尚の実入を沢山よろう利屋ぐ。
お寺よ大福帳とい帳ぐあぐ。うういふちうぬぐ。金銭よかうやうぐ
世の習俗。傍俗とも小方色世ぐと早く云うう。檀助信士

お三信女でとうふもむ。お歴くのぢ分ぐいろくの例式ぐあう
うちとう寺よいうとうぬとぐ。平人ぐ戒名よ。代く院号代く
居士代く大姉うぐく孫ぐぱ。ぐうぐう橋の沙法さ。おいとう縁應信
女と二字ぐうぐ。何院大禅定門ぐうぐ。貪惜ぐうぐ。むぐうい
戒名式ぐうと。孫子の代よ別ぐうと。棚経の坊さよ
尋てとさうぐでぐう。何雪院何く香花信士とぐうぐ。首
の字と三だんめ四番目の字ぐ。ぐうぐう。丈を頂戴で
続ますとぐとう。ぐうぐう坊さよんぐ

ひらってもらうと、又おくまさまの名、孫や夫のとちとち祖先祖
の戒名式おぼえまどゝ書しく。ひとりとりく拝む時まへ南無
阿弥陀先祖さまとろ。十五日の佛さまとろこゝろ亡くゝ陰しく亡くゝス。ホイ
今まるゝ精進日ぶつけ。南無こ経帝経中とうゝ。チョウどうもる
めっ仏揚でと咲て上やる。ナニサ宮ようお仏よまが付てゝ。ホイ
そんそうお備でと上ゝ亡くさ。バイ佛さまゝ平山免ゝ。今拝へ
ゝ亡とまゝく。南無ト貝式拝ぶてくでろうでお仏式ゝんばり。ペン
経帝で精名式落ちゝア朝ゝ合掌ゝとゝふが世万一同ゝちゝ

とら組のお俗よ。ソレトヨ。何院さまどうぐうぐうどうぐうお歴
くの男人分のと平人ゝ亡ぐ時ぐろゝの名中ぐさまくゝ内名利
名中の式ゝ亡。おりひき蹟さてぐまぐ不安で死ぐ生まで名利
名位の蹟式まゝ亡るのぐ。ハテ院号ゝ居士まぐぐ。べろぐろふ
ぐくと法性寺入道ゝ亡ゝ。三遍ぐげくゝ唱へゝ亡後佛が。
千年敷の蓮の上へ往生ゝとゝふ返辺**我**菩提亡ゝとゝ唱
もゝ。縁起女の名ぐ稲くゝ。まぐ迷ゝくゝとゝうまとゝ雲人の
でゝ法性自分拝ぐ。そんそうくゝべ長くゝてゝ亡拝くゝて亡拝ゝ亡ぐ

もと
仏式をまもるめろう。活居て云へ今のアタよどうのふとぢ有る分ら
ぬ様へうさ。そもそもぢく死ぢ先ぢ者もとるめろ。鉢を猪信仰お三信安で
ちゃうあ　いきて　あぐる
ぢ明くけもど。鉢を湯お三を活居る方の名ぢと云へ神道ぢ。
しに
死後ぢ仏道ぢ引ちくくまる。其ぢるい神四の祝名式死で様の
ぶつけくおいて云へ四の神ぢさ方へ勿体ぶへうう。仏道の法式
ちゃうく。仏ぢ信さちゃうん。ろ法名式号るのさ。ちく付く
くまちと振く付てくまちと。坊さ方の子ぢ沢ます。あんちよ
何ろ弁論のあるぢらうくちそんるるへとんを打捨るりさ。

ハテ地獄の沙汰と金次第。丈夫の極る寺社組い行さる方色あ
ちう。あちうめくまれとと云ぶ又位づくもい戒名ちうもど。
平人ハ出家縁起作女のやうな振くまちるぶい。出家の男ぢちう
正経金づくでもあるまいス。又修行づくや功づくもく号るう。お歴
く式ちまちど。町人の今ハ式ちまちぶ。大ちくさ者へちる振く
まちぶい。万両ぢ沢でも町人風情ちあちひハ功のうい者ハ出組
いうくありがちうぢう。うちくさちうでうういお歴くさちぶ二万両
ぶん
分沢ぢの。佛ぢ修行めちい佛ぢ。もいとめく一息でまとぬ極る

戒名のある紙「えてこうえんぐるちと空る物さへ毎日の家業を退
きてくれる。若者が死ぬのぐるの紙切を修行と正後ある中ぐ後
「八百屋の娘のお柚八仕合る者ぐ。まづ才一緒ぐて唱好うと。
一番先へ初むるさゅう。ちくアア相ぐおいふ書く後へぐ色でき
相ぐおようそうろう。お柚ぐ追善のあうんぐ。ぐくこ人う出来
くこのわやくぐくう。早いぐお徳ぐとあらうス。お出とろ
ねとろいくこ紙一ぐ行さ。ライちうと寄ぐうとく。ニへン。
安くく後へ家人ぐど。

土万億土まいとおりへが来ぐ。又近いとおりへべ近ぐ。
縁意信女緒いとおりへべ緒ぐ。又主へとおりへだ主ーサ
○此又の字ま清さう。不用ぐ。社ぐ。チョッと色で変う。
ぐ。ぐけいるぐ紙ーく清ぐ。そそとくく家よ。ヨマト
待ぐうぐそそ。ぐくく。
トそそうう。サアくくこんうう聴問ぐう。
戒名ぐまいとあるべ緒いとあるべ八百屋の縁意信女。
ぐくく。名ぐうく「俄ぐやくくといくぐ。社ぐ右ぐ人ぐ限

少ハ垂け猪へせ「土ゑつちまち姉ごやアイト　平吉「ヤがてまたと今日
へ御銭乗さらへども往て「何也へぞ往日ク子「たふまで倒まとぞ。
御飛が進物をして　猪嵐も南陸一片の…不盃銭嘗く来る
のご「奈まへ飲さするの天体でく下らんでの「癖よ玉ぶらうよ。
以上は飲ちやア身へ持猪へ「娘田礼ござんもあらくろへ今おらが
伯母ぬの子息が何宮よ来くわさ娘と出来て懐胎さすん
ござんすぐる秘密ちら世えて夫婦よまるさ「それを百度その
「まづ悪さ「鮒でらアイヤるまを飯ず円究の奥ア浅ろふ

まごをせう。猪右ちうきんそとさすぐ一緒よ往やせう「角ハ生よ
別ぼろのぞ「それでござと気へ心さやまつてドちまでの「アイどうの
ござとて「アイそんなら別るる「さとべつおいらも飯らう「去尻でまアア
長「遠猪へ「おらも飯らう「猪の風が立ちつと皆が飯るぜ。アア
猪へ「松さん外さん。アイまんろう「ライ猪るら「たら往だらヒナ
「アイ。ト立留り外「コウ猪笑さん。猪右衛門も三度い男でぜナア。おらが
小児の時分から同じうすとせ「人魚町よわさ面おぐてらく
洒落てを「コウ大勢なる宮へ来がつらんでぶ。留理部何不往くと

ぜ〳〵実ぶるあつさまあの野郎頃日もつかうまを帯ぶ利まぜ。

松〳〵ムウ〳〵まぐ欲ぶ出ぶくうらいつぶくるの〳〵いつぶ〳〵すいらよ〳〵え

ぶやとうのいこ才ぶまぐ色ぶまぐ移くの〳〵そさうよ〳〵もうつけ

見や。面魔ぶうき出ぶとあうつまうるとそろ〳〵姑ら〳〵好葉ふ

うのぶんぶい〳〵ちつ〳〵板支結をつ〳〵ちの職ぶのう〳〵つ〳〵ん不ふ業の

羽ぶ付ぶつまふ獲ぶ痛くつくからつきり伸移くせ。刹刀とのんる

ぶ梅の葉ふるつく梯く移る附ぶ子物初るまけ。ぶるる一日

腰戒折垂く俯向くぶりみるのぶうふ逆上ぶ見ぶ脇ぶえ。

今の話ぶやう移くぶ。切戒横んぶうふ。今ぶぶそよけ。かん

でも到移くふいつ移くよ〳〵羽ぶらつまう到ぶ〳〵夏ぶいつ。

冬ぶいつ〳〵どつち戒どうとも以移夏ふ汗ぶかつまつく

出ぶる。冬ふ冬ぶつつまつてぶかぶむ。夏の夜業ふ蚊ぶ

うふさ〳〵。掻くつふを油ぶうつ〳〵そんる物ぶ。渡世ふちそつ

〳〵〳〵行ぶまつふ云く渡世ふどさふふめふあんぶ〳〵甚上ふ

髪結といつのふ湯戒ふうぶ床を頭ふつぶ。人の横煙ぶま

とふつ移くきつうりやせん。見ぶでも大勢の客ふ内ふむぶつふ

人ぶあるゝる十人ぶ十種紙そまくよあーらゝく。其人の好る
るゝ連ゝく紙合せとゝいふ。女郎と同じ調子よ。武高賣ん
ぶ
別ゝく肉腹膏茅ぶいのさゝそまぶ尚世ぶゝあゝゝ髪ぶ上ぶ
ゝゝ渋面ゝくあゝゝゝ浄ゝ来ゝゝ移ゝゝ世ゝるゝぶ好ゝゝ。ナア
ぶ
「男ぶ好ゝゝ十二男紙いふんゝゝ「ホニヨ」ゝゝくのゝるゝぶ毛数ぶ
ゝゝゝゝゝゝ移ゝゝゝ「ゝゝ何の業でゝゝ乐ゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝ年ぶ老ゝゝゝ来移ゝ「五十紙ゝゝゝゝゝゝゝゝ
「五十六十ゝゝゝゝゝゝゝゝ来ゝ移ゝ奴ぶナ

「ゝゝゝ何商賣でゝ光明の悪いのさゝ大概ゝゝゝゝゝ
ゝぶぶ考ゝまく紙ゝゝぶいゝ「町内の口ゝでゝ床でゝ代り
ゝゝゝゝ今見いゝトいふゝゝの「場面ゝゝゝ別てゝ床でゝゝ
ぶゝる。そゝぶゝゝ体の型見いゝる。ゝゝゝ重ゝくゝゝ。口ゝゝ。
毛角代りゝ結ゝ移ゝゝよ。ゝゝゝゝゝゝ遣ゝゝゝゝゝ
悪いゝゝ。そゝゝゝゝゝゝゝの髪結の上ゝる奴ぶ折角別漆
ぶゝゝゝ。髪盥ゝゝ紙ゝゝゝ天地町ゝ往ゝゝゝ「中央横
いのぶゝる。ゝゝ「一ッ町内紙ひゝゝゝ移ゝ「ゝゝゝ立て

男もぎと蜻蛉
見まもり「松さん。そもそもつけこと山繁茂ると如才移下よ。傷面
を五六町移り。床ハ二ケ所頼りく皆男子紙生しく来くこ。
云ふハ移。其上ハ此床ハ自分ハ多紙ありて敷だるう。そもそ
ごろう金がうまくとうとうケ「松あわうこと頼りこと云ふと虚
ごらうえ「他の名まあまくく内絶いてんぐ居るのス女の
るもと敷だうまやう五分を遠移へ「一月の上弱ぐ残りこう
大きるるこらう「松そもぐろう床の立流るる紙ん移へ
「さうさちうけ毒糸ぐ金銀瀧碑碟鴉瀧等ハ寄

細工ハ寄ちもイヤ又もこらぐ壮い頃の髪結屋ふきこ移へ
手桶ハ流ぐ流ぐ。きこうこ小盥ハ表の障子ぐ助
廣治の紋あり」魚乗ぐ仙丸ハ仙の字十ぐ十さ。史紙二ツ比
翼ハまく。丹と清「墨ハぐ別くハ移色さめハ真陸子ハ
類こうのぐ蛇振ぐ正平紋と出さい中へ立花の移る紙墨
画ハく。清墨紙入ハこのぐ後箱屋の陸子。さて又表具屋の
陸子ハ陸の家紙倫服ぐ現居る達麻さ。今ハ移ちハ見ケ。
昔ハど沢山へ床の陸子ハ助廣治の和ハ役者の役紙対へ。

東洲斎又あふ◎市村座森田座の立役㊇瀬川二代目王子路考回は江戸一面さ。其の中まれ
素人絵の武者や役者。あるひはさまぐの見立物などが有さえど。
彩色は丹に山梔に藍紙など紙用なく。どうさの無い障子へ画く
くらゐ。墨出の外へ藍がにじみ出さとやら。目の中紙青く彩るやうな
丹の粗はこびまつくし。山梔がみると黄色と別くになりて煤筆の
痕がありありと残り、パイやハヤコンてら色さ物ぢや。絵ぐ。近年まで蝕
どうか夜雨鍋に落て墨とさしく油障子。看板出した提灯屋などの
く立流るるさ。役者の似白いも浮世絵師のお弟子が画く如くなる

今は極彩色の障子らのさまぐのおもひつきが出来る。紺屋染乃
暖簾のごとくむかしは大文字や摺拵ぞあるてが。今ぢやいろいろの
人物を彩色に画せて。色よげに染抜せる。またふ人が器用に
なりまして。万事が痒い所へ手のとぐく極さ子。錺さん出せば自由に見る
世の中。ト以前鳥居のちやう八へ
という男入来る
へ蛸助さん。何故までも紙は障子の縁で
仲のことだ。おめへ此方の弟子で居るぜ「うんまやまさ。あるがくれ世の中
ぞくいるさ。へおめへ今あるてろ遅い。コウ青首が一羽締めてく。
元画工の蛮絵が宝絵入るへ「おいらまでつくめへ安お徳さ「あさ

ぶけ衆。宴のまくぢと継げ。やぐらそんざ。トテチンテンツクギャツクリを しこ引出三まい線でらくらん

あぶらさへあつくろしいは げんきのよき男なり「サてこうではございませんか。たくさ一羽で

それは愛敬なる三芝居役者声色立役は幸四郎三津五郎団

十郎松助とどめさんちやう出来ません中二階は大和屋に紀乃

国屋。三河屋に伊勢屋。八百屋に万屋お好次第。何でも出来

ません此私の声色を稼ぎつらひまする面が外に類と云似を

ござりまするは野郎紙あつかくて道頓堀。芸しくて歯につけると

後家門の情からくも北州の千年も蜉蝣の一時。盧生が夢

も五十年。一時の栄花は千とせの紙延る。千金一万金の出ますると

ころからは思案の外。鈍遍は別とござりますが是は僅な風の塵

ぢや。四百や五百はうるゝかるかも。おつりひろひまする。二朱や一

分の端た穴へもおちてるとござる。まことに中田地の繁花な地。

入松千破あたふが出ん松千破。まで心得をとるんと夕方があるので

ござりまする。さりながら夕方さらば風味合をもつて代が八百。

一日あがりて吉にとおもしかりを代とあらくおとふ殿様ま

ござ元朝より大晦日まで、おまへにすゝめまするところのくわ宝店

面が看板お子さまがくまぐをはどんで。今日の客は在て明
日は山の多へ来るこで中を胡乱る者ぐどごろ拵び雲ゆ遣
と雲板ひがるん。イヤ〳〵ろんものさうぐるん。ちがいふとろいろ
うぐまいとおろっしゃちまんをのでとるい。若さやうるはに仁さ多
ゆ。コリヤ。はは通記〳〵をまっくるる。ふぶ拵ぢや。うまぐる。我
物紙をいと中く商ふ者一人をどごろぬ。雁を塩を食く
こ拵び真味がおまをぬ乃狂まろ。鶏ぐ山寺の鐘ちくいろとのぐも。
法師ちろく撞木紙あてざまぐ其音色ぐちをぬ酒屋乃

門は三年三月お立遊をを頃ぬ酒ぬ酔ぬ道屋ぐと
ゆ。あぐをまっく。実ろ秋ぐ口上は遠ぐど風味合ろいさと
みっくちろとさとうぐ今日ゆろぎろまちぬ毎朝
はぐ下ちくは拵落仕りまとる鳥屋ちぐ。口ぐ酢くるんる
ちっくさんお茶ぐをい湯でをおくを。お茶屋ちまちぐぬ。
ちぐぐぐさんまっ〳〵ぬ。ぬくきぬ紙ぐくちぐ。ぬのぐ
ぬぐ。ぬ嚙るのろ〳〵ぬろろ先へけまてくとろとぐるぐ〳〵香屋
師ぐいろひぐさ紙ろく光てぐぜ〳〵おきをとおきをとぐ感ぬを

感心だ「讀本や大道講釈のでんがらが紙くく暗に記してあるさ迄
出來秋へのこ「どうして〳〵。おめへなぞはそこらは生れが出來るめへ
「出來そこないだ〳〵また坊主〳〵「さういふはうでもねへ位な物だア
「コレ〳〵ちまけても〳〵いふならは二百文「そんなら二百やるから紙
またちやア細ら坊へ。お中らうさん〳〵ふだらしな元來が六百だ。家から
余りぶるから五十掛紙して五百五十文まけてやらう。ト取いだして千二
まるりうる紙　五ツやまの千本ざアるト六ツむさ〳〵七ツ南天
さらりくる　三枚ずつ
八ツ山ざアるト。ぱちん〳〵ひいふうみいよ「贅さんに感心してかんら此剃

刀を研でおくんなせへを　面倒でござりますせうがおくまさんが
おくめへやまきト「へん　おくまさんの無分心さうだト五逢兼細せまへ
するめへ。〇ちやのまるさ「コレ手傳の唄紙うるふる。田舎ぶつ紙有ぐさ
さうよ人様ぜ「おめへの見る坊ん「口の達者な調
市ぢ「おめへに似てさ「ホイ一言も坊へ先がけだ「今は小
稼ぐあの唄ふせへを流行があるから越後あくびするから
生る替女の唄だの「ござさ「そうな唄でナア。威勢が稼ぐぜへあ
唄ふ人のうふの皆きとてんだの。おまぶ越後着うト東るの

紛れて我知らず「そのつへもとを教くくん」と「色角あんるとを見えさるもア「今唄くく文句へ全体をいめさ江戸の者と不孫の文句をちくさるよ而く切掛くくくくてゐるのゞ瞽女のくふ越後節の真面目ことをでごごんぶご教くやらくぶいく

ちくとと「さりいと我いふぜアー「くさり聽てくくれ出寺さ

「きく後人内へ相場ゞ右を後へナ

○「千畑引。荒物町のゥ染屋の娘。姉と妹弦くくくんさア。

姉へもとちかい葬のゥ花妹入ゥ咲く白菜のゥ花姉ゆやゞ

しとちくへいが。妹ゥ「さくよゥ立頑掛く。一ゥ岩和お地

荒さアまよ。二ゥ秋保の白山さアまよ。三ゥ懸殿の金毘

羅さアまよ。四ゥ佐渡の吳光寺さアまよ。五ゥ吳天

の若宮さアまよ。六ゥ六角の祝者さアまよ。七ゥ七尾の

天神さアまよ。八ゥ八幡の八幡さアまよ。九ゥ熊野の権

現さアまよ。十で所の色神さアまよ。掛くこと立ゥくくね

けゥ見ゞおの小川へ身を投捨くく。三十三尋の大蛇とくち

アまく。水流流くくくりくと巻きやアきやんきゃ。

「実ら爺さん。とぐけつ婆さん小桶で茶ア呑ろ姑ぐ
我を折る」トぐぐ雛とのさ
「とぐけつ婆さん小桶で茶ア呑ろといふ」そど。其前後の
とん雅を言ふ後。今代小湯の喝らさのことを
○「私の船頭ろ晒三尺貰ふ。ちーが冠ろゆや晒ぢをとよう
いが。爲ぎ冠ろゆや晒ぢやこアるい。何と深ろ深ろ聽
けば。一ろ捕二ろうきつぅぢて。三ろさアぐり巻四ろ獅子牡
丹五ッわしの千本掘六ッもらさを。七ッ南天八ッ山掘
九ッ小林式ちらしろ深ふく。十で爲稲の好の稲ろ深ふ。ぎん
ふさうよと言ぐさ捕るゆん毛ュ。
「耳ろを時ろと當時ふの風俗式ちろよう。又後の人の
屈ゆもろう抜ぐろう。ちゆ式一冊ろ出とろふくこ。まぐく
いろいろあぐたんとこふとろぐくうろう宮ろうトうふ
せう「宮ろうクッタ一ッ云ふくん孫人もを式告ゆこんろう
クッタ一ッ知ぐ陳式教ゆう
○「おろぐ陳ぢやふい聲とうふく。石臼風を切る。桶乃籠

掛る人がたのみが大工をさつしやる。桶屋をさつしやる。左官をさつしやる。木挽をさつしやる。小さい内から餌刺が好きで。竿の根引さし緒の草鞋。黐を筒にさげ黐竿を手に持。下の方から二丁目の。上の方から三丁目の。合せて五丁目の真中さ須で。榎大木に小鳥が一羽。おいら刺して見ますよと黐竿丸めて。黐竿短し小鳥は高し。そこで小鳥が喧嘩紙をさつしやる。おまへ刺さんかいとしや百舌鳥の落さつしやれまのぶへらしやるけれどもご縁あるから今度来て

刺しやさんせんせよ。

〽サアよしろ。一ツ宛若さ出のどめて盃三ツづけ踊しやそ。ほかれたのすがこ

○こうしておいらさんの買たびそぶらくいろく〳〵ある〽一冊が僕八銭。上下持ちて小銅十二銭と出す手に入ける。私があ乃うくるよへ本の表紙が大きくりつぱさかうく。お声のよいお方がお唄ひなされぶひとつやの御厨め。御利をあらぶくくひまするうらにおりとあるさい紙代板行代が僕小銅八銭。〽イヤおまへそれでおくら。人紙茶々を男ゞぜ〽茶々を着で孝経関宗明義章第一

そうぐ。ちんふえんのお師匠さんぢやア拾ア早くいつて医療教ゝる
のぐ〳〵教ゝる馬鹿をあるスこと。ちつとも博学大才内金妻帯ぐ未
乃ゝるぐぐ孔明提灯紙持て補草履とるゝ世をいのぐよ。コレ
孔明といへば屋敷の上は通俗三国志コトく紙いくべ紙ぐさと
云ふ家のるぐ。アア平仮字付ル字〳〵のぐ。今ぢ真片カナの
本も字本ようゝをとらい。ゝ。ゝとゝ女ゝと続るぢ。ゝ
おちつぎの字ゝ。ゝ〳〵口の止ぐ拾ア〳〵ぺゝ〳〵
と紙へ仮ゝ。ちぐゝ〳〵そねゝ。ちぐゝ〳〵ゝ

めいせまぐスコウ山本の雑ぐ亜ぢく〳〵土ゝさんぐ記ゝ紙いゝ
ゝ〳〵土ゝ。当惑るぐぐのゝ。何紙いゝ唐人の孫云ぢ
云ゝ居るぐ。あきぢやゝ語紙とゝ拾ア也同ぐるゝ。ドレ
く土ゝぐ本ゝゝ液とつけく完をあけくやゝ〳〵ゝ色。
代本屋ゝゝ偽くのぐ〳〵イち陀佛ゝゝちんさん。あゝま針
の療治異ゝを九の字。ゝういくイせゝチゝくのチゝ〳〵毒
遠ぐ〳〵いづを本音のお法ぢやア拾ア〳〵まんざゝ拾ゝ男で
るゝぐ〳〵あんまり拾ゝ男でと拾ア〳〵姉娜ゝ潮来で迷ア

せる。トふるひ声アふてこふひちてことまてことてんてんとんとん。アうろくッ。孔明七
星壇に風を祈るッ。ト本をよろしくけろろそてある　デモ医者のやうに風邪ぐる
よを征ス「馬廉ア云ふ「そゝてくと本やうに読るゞ不
思議ゞ「読ぐるんせう。曹操横て槊を賦を持をへ侮
のるゞ「おゝ己とを読ろ征人へ桁読にやうしよめゞ。
曹操槊を横て詩を賦すと読もの「そゝるゞ知者
ふそゝおゝ己を紙へとまするる征人ス字が宙返りをしろり。
きゞ紙返ろよりきるうら。宮へ読ふゝへ。徐庶命。徐

庶命をウ受る受てまでてまでよ。受る受て。までかい。兵を兵を
引イて呈引イて出げきバア。てけきバア出エげきエバア。曹操役所
藏吉やうがんせ。よかろんぞや征エ。曹操。今ハア都都のウ。内心よ。ウ都の内。心よイ
かるるア。心よ。心よかるるダウウ。ぞすとて大ボイ大ボイ。喜び
ぶり。ウ喜び喜びトウウ喜びろ。馬ボイ乗イて。エまりゝヅず川
くぐのウ。先陣のウ「アミミヲホミ「イヤどうをとてスラ三遠へ笑ふ
まいとそろとふきだくうら征人「よせく「外空丸て
「おゝ己が読せうハてが出せうの悪いのよ「まゞ三行読す征人ゼ

「くせ先陸の。そら先陸のウへ先胡の巫女の出かける節だぜ「東西
く先陸のウ。陣を見て陣を見イ。めヘリイめヘリイ「コレく何紙
いふめへるみを紙いふめへぜ「そまぐらを打出しくあるめ紙へ光
かう讀出しくるんや「大変みを紙いふのウ。先かう讀返しをふいは
又まぬらぬ人は遇て出るぞ陣を見陣を見「陣紙見陣紙見盃牛房
「東西く。陣紙見ん「陣をとんとうござえナ。大概推量して讀むのざ
「どうまるく推量が出来るものか。新ぞうりいふぜ。ちまが関の
推量してとも字あ玄他と仮字がふりてあるから馬と来

てといふからおれる馬士といふ字だらうとおもふ人ぞ先陸の仮字
が付居るス向ふを荒神さまがあるから推量がうまくいく
あんら。○其後くイ「ソレあるらうが韋駄天が自ら馬を乗て推量く
小僧紙ひようるあうがざらく早いそく
○其後は此めふかくり不ヤ「ヲヤくそうき遠やさコヲ様へぶい
まのアきうが頭ちがよ大くイ神楽ア
「でとまい大船ぞく「大船をとまをおおとりさる写又一合 ヨリヤ又
ちやく。大船一艘ヲ。一艘馬席とい「コウ大船一艘ざんナ。大きな船が
一艘といふものぞ紙推量をするナ「タウトよしく。そそ中くそ
中「舌切雀ぢやア後へ「。そそ中央にイ字ぺ立師帥のウ字イ。

出イさるウ。旗とり立させ。〳〵こちらの馬ぶぜ左右ゝ裕徑。ウエニヤ
水さアいぢー水塞ト。ウ左右〳〵。こちらの水塞ゝそぶてそぶて。
傍て豆。弩弩。伏〳〵。亜自クアラア。〳〵リヤ〳〵又こづてくぶ。庚人のくせるゆ中ら
ぶてけるも旅さるぶごら。全体こづてトトいふめい昆布のるぶ知ぶゆよ。めくさちい
かこぶこと約さとぶ紙ゝうゝまるゆ。お見ふ仏あと店の妻孔さんの位でのぶいさ
うゝくゝいこがこの芝居仕さときゆ。奏のもやぢぶ。こづてくあぶてんうこづ
うゝあぶてんトいふのよ。ハテナあのおやぢぶ食ゆまを。せどうのぜこづてうあぶ
んうぶごら。但一巻ぶ云いうゝ水ゝうあぶトくんうトいふのといろ〳〵考さあると。
ライこづてくぶんちと笑ふ人ぶあるうト。のぶ〳〵ゝこんうトゝ昆布紙をつま
結ぶごのぶ。カリ〳〵と噛つぶとと中ゝ山椒ぶ這入くあるうチ。そまゝうゝ傍の
人ゝ山椒ぶ這入くあるうとをゝとゝ山椒ぶ何ぶぶ這入ぞい。ゆうの山椒ぶ
あるゝ〳〵這入るうゝもゝ紙どこちの山椒ハ見ぶるいさうい這入ぶうい昆布の
中ゝ山椒の入〳〵あるのぶやゝとぶやゝまを。ちまを一言と紙ゝうぶまろ

て居ぶぶぶぶぶこづてくとゝいふをゝぶ紙ゝまをぶ。パテこづてくぶんちやゝまろ〳〵くこづてくを
いふかいのゝいろまぶくいろ〳〵くまをゝんちぶ〳〵ゝ紙ゝまろさ
。將棋のウ上ホイ坐ゝと。坐ゝをウ。時にイ。走〳〵「時ゝ走〳〵帝
ぶぶり〳〵東西〳〵。アゝとう止ゝせう。ちろびぶ〳〵有ぶゝちろ〳〵まゝこ今
まぶぶかゝろ〳〵ゝ泣ぶぶり。讀ぶ〳〵人ゝまいろ〳〵風のあるのぶ。
土形さんハ背の低ぶ讀本の拓でゝろ〳〵ゝぶ「ちゝぶ助ぶゝ帯
も本ゝ讀でハ吃る〳〵苦妙るゝんぶ其ゝ讀ぶ飯らう〳〵もゝを
紙べいゝ腹筋ゝろ〳〵ぜ〳〵アイそんうゝ〳〵アイおゝゝ〳〵ユウゝハ
ぶぶゝとる〳〵紙〳〵おきやアぶゝ。ゝ二人ハ〳〵サアゝ花ぶん刺

刀などやらう。閻魔の庁さへからの沙汰おかゝさんはうろんでおいらい
がござりますとの押かけのお客よ参りました「アイト
門銭 出ると あゝまアおかんアいうといふ。そのおめかしきく。ぶらぶらアイおめ。引ちがへて風呂へきた
包を脊おひたる 櫛吉「鬢さんお透りよう「吉さんどうぞまた。さとき。そこでや
いゝ役人。先刻櫛八が来てが往のを買役人。まだいゝ役人さまへ
何の役人か間歯の役人か「ありやまア「間歯でも買へ 櫛吉くしの中より
出して見せる「さてもせう一向ご此なる櫛がつくるものか。いくらで百五十する
櫛吉「二百さ「二百ときまらないへ 吉「ナゼ「五十安いぜ「二百五十の

間歯さへまけが違ひア。持往らく。支永よせうに年頭に又つ
かと役人やるる櫛を見せるとやうぞ。おひござ「ハイくありがたい
仕合せ「それとそうぞよ「おめへはそれさうぞうちの虚よ 下義鉄をたまひさて脊おひ
吉「アイさやうるかやう。下出して引ちがへて引かけの男「お宿まうどぞりますと「アイお出
まごとござゐやせん「ハイく。さやうるやう又此方よ。下出る しれ油の垢買ひ出入そてかご銭がけ
て来り由きなが ▲又一人来りのまへりを引尻を早て出く「此方は出家御法事ござい
ますこ。鬼きげんよろしう思ひ 下むかふそで さし出を「おもしろくずおくてげ。
此のさっハ金を銭を銀河を。下 えん 稼うら落てお乳の人いかまで

ハイ〳〵「アイ恒さま庵やせう」ハイく。毎度お面倒うぞんじますお願ひ
ヤまさと〳〵。モシうまりやの銀吉さんかんへんるさいますろ
ぞ
「ムダ〳〵さんぷり来るさん」ハイ「ハテとまんさとろぞ。そん
なう悔るのうムダ紙と来くまわりませう。おゆるまろさろ
上くおろんるさいます〜をー又おつんへんるさろどんそのイさ
ぞ「幕支とんへるテ」ハイ「ハアちを上濃ざ子。イヤ出る系ぐませう
ぞ
「アいろる。一ぷく呑性ね」ハイ「今貝いまぐ山のもへのさ後きもア
うりません。モシちをおゆるさいます〜。大分振さ。霜枯の景氣

ちぞアどぶいません〳〵「とろちん雷枯ぐ冷かくまんろ〳〵」ハイ
さもうるろ「肉ろくろくんろる」ハイく「ト先そ彩何人ろう作者もろろど四月出乃
おろいくよ後紙ろぶ〜たとは
ろうぐうれ出深ろぐ〜「ちものぐ」ハイく。今度は肉証ぐ漬居るの「あん
まり悪ぶひどひうろだまんく漬む」音の〜移出ようふ
くまと行く食ふのぐの「食ふといろぐうんぞ食ふくなんさ
ぞんこせ
「新見世のも打蕎麦ぐ出ろさ」横町の木戸係ろ美ぐ
押付ようう「今ようんぐい」又負出ようとろろく「ちぐぶろろり
ろのぐよ」おろくとと出ぶろる出ろさ。何ぐく勝さ者ぐ学ふ

のろへそんる法ぶあるものろ負ろ者ぶ驕るのえへアそそそどやア
些猪ぶ悪いへろろい音武虫ろさナへ十ニサ蛸ぶる驕ぜるぶ
毒の毒よへ三押ぶおそそ。サアなくろ。三蓑ぶろひろへ折結
くへかるぶ用後。二蓑ぶろひの三蓑ぶ猪負へトろへ待ろ。
畏脂武ひいくくんやさト志くやろう 人両五。二。九。十。へどろのくく
へ十とふ蓑ぶあるものろ。毒ぶと十わ折後法のぶどへツりヤ
志ぶろ三年枝八年。おろア法ろかまい紙へろろ十毒ぶ行で
も数の合くあろくさめ武猪ろさろ。其紙ろ不自由ろ蓑

ろろろ不ぶどへチョッそんろろ中をへろんの怒さまろこトウ
ハ後人。サアこそろくぶよ 人両一。二八。七。三。五。ヘトあろ四。四。ヘトあろ
声ぶあろ後三ヘどろく九。五。二。ヘトあろくあまをへ些待くくんる。おめく
宮ろ拂ろくの。今武ぶ猪負ぶの。蓑先ぶ悪いるぜ切ぶ。
芋亮ぶ宮武撞くどへ山ろ中ろへ西落ろくを人へろも蓑道
道一後ろひろろ仁ろどぜ紙ぶ猪ますて蛸ぬろ蓍麦衆奏者ろセ
ますをろふまのろセ人。ちんどろくくこ三ぶい食ろろそばろ。
サア志い。ろそろろろ鬼ろ後梅辨蓍ろ薙刀ちまろる交ときて。

きめりの大丈夫〔画〕七十。八十。二十。三十。五十。三。四十六むてそめさせる一もどうぞ。コレつぎん〽一本をもらはなふ負けて〽うんこで出来ましてござりまする。サア〳〵蕎麦屋へまあ〳〵誂へて来て。コレ小僧。途中にて喰ふな。そうして代をさきへ持つて来いよ。ヤアきさまらくちのさいふ好ござる。まつりて尻を端折て往く。〽チヨツ。寒い〳〵ぶる〳〵。蕎麦屋よりは蕎麦のそこがよい。トいふ所へ向ふより代をもち来て 門口より〽ヨヤ髪結さん。さて〳〵おさむいことでござりますね。子ヱ。御免なさいまし。ヨ〽ホウこれは

お袋さん。よくお出なさりました。ト奥の亭主〽コレ何や。何がお出ぞよもんぞ。二寸末さん女房金持屋のお袋さんが。奥より女房うけとりで〽これは〳〵おめでたい。よくこそお出なさいました。サア〳〵まづずつと〳〵お上んなさいまし〽〔袋〕イエ〳〵もう此所でお暇いたしまするぞ。二寸糸の方が祭ましてね。子ヱお前さん。旦那でせう〳〵トまだ〳〵づら〳〵此方はよろしうござりますよ。子ヱお前さん。御祝儀。拙先お前さんまあとお掛なさいまし。もう御無沙汰に〽〔女房〕アイあなたはあとおさへでしよう〽〔袋〕ハイ〳〵ありがとうござりますと別れて

番手代　おまへさん。いつぞやまた内まとろこけおそ
さぶ独りごでいまとこそ　おまへさん。夫でもおそさのかあくう
もごぶいませんぐ行ろうおそーう存まと。宿でも一す
お弁当弁当ありとぐらてごぶいまーしぶ。見とえおまさん子。
お風呂きさの出用ぶ遅く　おまろまーく。イヤサまとくよ
おまへさん子。こなくのお服さん子　ろとく　後見ろくふぐさい
ません　程ごぶいまとのさ子。そまつぐごぶいまとろ子
おまへさん。家内中ごてんく　新就いくーまとそ子。私ろごと

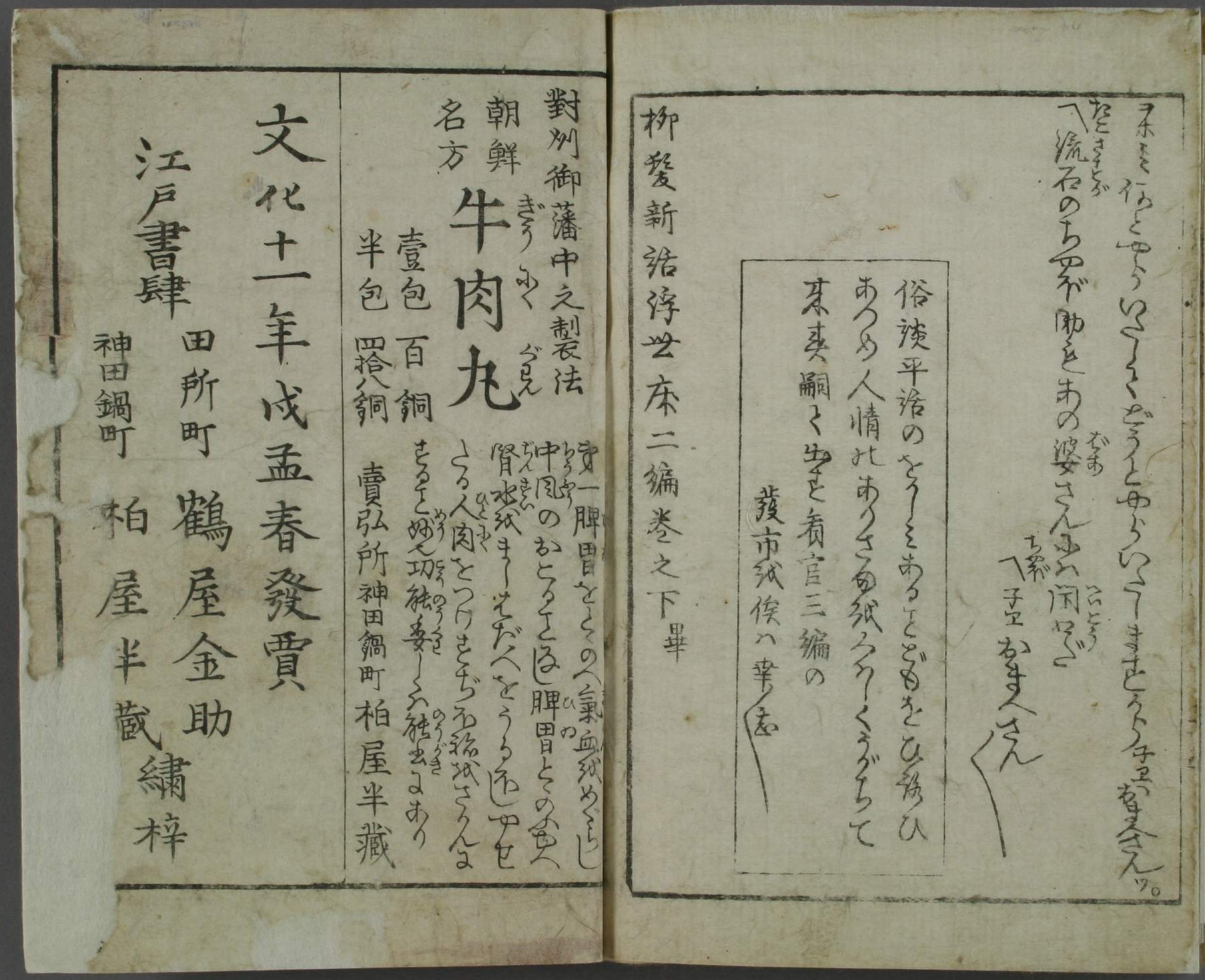
アルくとくきませんうう　おそろうお店の方のおまつぐ就いと
てす。おまへさん。汚湯へ参る前もごぶいません。イヤ宮ア　体ぶく
あくぐふるごぶいまとひ　まごぐす。若外まとろう主と
おまへさん子。ろくと云てごぶいまと。夜あるごぶ子　おまへさん。
私ごぶうやまとのさ。山ぶうおいそーいあうがこいうのぶ。
正月物就拵こいまと陽ぶるーパテとまんこあのごと子　おまへさん。
チョッいろさ。何を見ぶ不自由というでいる。洗濯物乃仕立ぶ
不合ごぶ他所乃品数就情まごぶ品ーまくと私ぶ　は

ことばをおまへさん。主がやかさまとまことに。ナニ。長ねんごぶ沙汰をしてゐる。おやすらく。ゆへ及びぬるとも。ざんさと。長ゐるがよいと。おやかさまとのさそをとごぞうとこおまへさん。洗濯ものいつまで。積でおぞいますとのさイエわつまを。ちゃうどらお尋ものまゐまをど。何とこのをとごぞいますをうが在の。祝ぐごぞいますとこぞうこ。ふうとぞうぞく。おあくをこをいません。やうふ。ラホ。今日ヒこおまへさん。昼まぐくまをまをとうちホてうど五形ゆ。法をなまし。昼ぞうこ。お爽ぐ。ゆ久し

ぐ。ぐ。糸ぐ。こ。其序。ま秋ゆさんの。ゆをとお。ゆやさをと在。ますと。夫。おまへさん。出祝。千年。夏をぐ孫ぐ子。おまへさん。出。ぞ。ぞ。ひさ。ぞ。ぞ。ぞ

めでたくるやうや角やで子をおまさん。まことに〳〵世の休まるやうで
ごぜいます。ヤアちんと義さんへお達者でごぜいますと。女房〳〵ハイ
ありがとう。孟極丈夫でごぜいます。こんぱん今まで何をも
せぬのさへやく〳〵そをこへちんとおイ仕合はるのでごぜいますと。子ども
流へ何へおけ孔丈夫さ及が一番けつかうなとでごぜいますよ。
お屋敷のお妹孔さ及をおさんくしうお勧めさいますと。久しう
お使ひ成うけまうます。〳〵ハイ。ありがとう〳〵お序よろしう
ちんちやんちやさいは。ホヽく一す参りたくどうせうかうせうを

ちうだうり呼ちくやうく今日参ります。ハイさやうなら祈
角ゆきぐんよう〳〵まアよろしうございますと〳〵ハイ。いへのうさう祝
しちやアをとらまます。今をヤス通りチヨホヽく。格又来来
おりでさく〳〵ハイ。あるすらふを。ハイく。ハイさやうなら。〳〵ハイ
さやうなら。ト立入る。たと所ちぐや八百人先刺ちう被なぎさ及のたと
多嘴る婆さんぐの〳〵人よ呼ぶ紙きちうイが〳〵コウ。能く
きちつくポイと眼さぜ〳〵世話ぐるつくいちそいつのス〳〵仕ゆと
やうぐごぜいますくく。角とやうぐごぜいますとうちチヨおまさん。


柳髮新話浮世床二編巻之下畢
俗談平話のをかしきあるをとゞめをひ移ひあつめ人情れあるさ面白くくだけて
東奥鬧く生を養宮三編の
發市絨俟ハ幸志
對州御藩中之製法
朝鮮名方
牛肉丸
壹包 百銅
半包 四拾八銅
賣弘所 神田鍋町 柏屋半藏
文化十一年戌孟春發賣
江戸書肆 田所町 鶴屋金助
神田鍋町 柏屋半藏 繡梓